

漢詩の奥義をわかりやすく

昨春、『漢詩名作集成』中華編と日本編がセットで明徳出版社より刊行された。中華編の執筆者は、かつてNHKラジオ漢詩講座の講師を担当した宇野直人氏（共立女子大学教授）である。堯の時代の「撃壤の歌」から魯迅の「自ら嘲る」に至るまで、中国歴代の漢詩名作四三一首を時代順に取り上げて、原詩に書き下し文・通釈・語釈を附し、さらに作品の内容、構成、成立背景、作者の経歴と作風などを簡潔に説明するといった、きわめて懇切丁寧な、しかも総一二〇頁にも及ぶ大部の著を、すべて一人で書きあげたということに、まず驚かされるが、それにも増して強い印象を残すのは、文章のわかりやすさと著者の該博な知識と確かな専門性、そしてこれに裏打ちされた著作の内容の豊かさと深さである。

したがって本書は、高校生が読んでも理解できるほどわか

中尾 健一郎



A5判 1,122頁
明徳出版社
[本体 6,000円 + 税]

宇野直人著
漢詩名作集成
中華編

りやすい言葉で書かれているにもかかわらず、専門家が読んでも十分に読み応えのある内容になっている。氏はこれまでも多数の漢詩注釈書を世に出しており、本書はある意味その集大成であるともいえるが、けっして単にこれまでの著作をまとめて一冊にしたものではなく、むしろ過去の著作からエッセンスのみを抽出し、さらにご自身や学界の最新の研究動向と研究成果まできちんと盛り込んだ精華版である。その一方、ターゲットとする読者層を専門家に限定せず、一般人をも含む幅広い層を射程に入れていることが、一つの大きな特徴である。

以下、まず筆者が本書を読んで特に印象に残った点について少し具体的に述べよう。

一つ目は、通時的に名作を取り上げることににより、異なる

時代の関連する作品に目配りし、しかもその関連性をわかりやすく簡潔に説明しているので、読者も実際に二つの作品を読み比べることによって、理解を深められることである。例えば、宋・陳与義の「岳陽楼に登る二首」其の一（八九二頁）の説明では、この詩が杜甫の「岳陽楼に登る」（五九四頁）を踏まえていることが指摘されており、読者は二首の詩を併せ読むことによって、杜甫がかつて戦乱の中で抱いた悲しみと望郷の思いを、陳与義も実感として汲みとっていたことがわかる。また、人口に膾炙した「大江東に去り、浪は淘尽す千古風流の人物」で始まる蘇軾の「念奴嬌 赤壁懷古」詞（八六七頁）は、宋・柳永の「双声子」詞（八〇六頁）の影響下に作られたとする指摘も興味深いものであり、実際に両作品を読み比べると確かに納得がいく。

二つ目は、人間社会の最も普遍的かつ永遠のテーマである「愛」を詠んだ作品が特に多く採録されていることである。その一つはいうまでもなくまず男女・夫婦間の情愛を詠んだ作品群であり、『詩経』からは「閨雎」（三五頁）、「静女」（三八頁）、「女曰鷄鳴」（四三頁）などのようによく知られた作品のほか、村娘と旅商人の出会い、楽しい交際、結婚、そして男の不実による破局までを描いた「氓」（五二頁）のような長篇の作も採録されており、『楚辞』からは女神の恋の悩みを

詠んだ「九歌・山鬼」（六〇頁）一首のみが採られている。ほかに「古詩十九首」其の一、同其の二、同其の八、同其の九、同其の十、同其の十九（二〇五―一九頁）、白居易の「長恨歌（抄）」（六六九頁）、宋・柳永の「雨霖鈴」詞（七八八頁）、宋・秦觀の「鵲橋仙」詞（八八三頁）などを含め、男女・夫婦間の情愛を詠んだ作品が数多く採録されている。

そしてもう一つは、親子の間の愛情を扱った作品群であり、西晋・左思の「嬌女の詩一首」（二七四頁）、陶淵明「子を買む」（二二〇頁）などのように、子を思う親の気持ちを第一人称で詠んだ作品もあれば、唐・孟郊「遊子吟」（六三七頁）、清・黄景仁「老母に別る」（二〇七四頁）のように、子を思う親の気持ちを子の側から付度して詠んだ作品も収録されている。また、苦勞して育てた子燕が巣立ったことを悲しむ親燕（劉叟）に対して、「あなたが若かった時も同じように親元を離れたではないか」と諭す白居易の「燕の詩 劉叟に示す」（六五七頁）も収められており、著者はこの詩の説明の最後に、「世代間の確執、世代交代に伴う悲哀。この詩に示された問題は、きわめて普遍的なものである」と記す。つまり著者は、時代の隔たりと関係なく人間社会に存在する最も普遍的な感情であり永遠のテーマである「愛」を一つのキーワードとして漢詩を読み解くことにより、その内容の普遍性と現代社会にお

ける重要性および表現の可能性を、読者に提示しようとしたのではないだろうか。

三つ目は、通説あるいは市民権を得つつある学説に対して盲従しない著者の学術的知見である。具体例を三つ挙げよう。まず一つは陶淵明「飲酒二十首」其の五（二八六頁）の「悠然として南山を望む」句についてである。周知のとおり、この句は「悠然として南山を見る」に作るのが一般的であるが、著者は敢えて「見」字の代わりに「望」字を採用する。もともと陶淵明は「望」字を用いた可能性が高いということは、研究者にはよく知られているが、一般読者をも射程に入れた図書において「望」字を採用する例を、筆者はほかに知らない。そしてもう一つは、唐・劉希夷「白頭を悲しむ翁に代る」（二八六頁）の「言を寄す全盛の紅顔子」句の「紅顔子」についての解釈である。本書は通説と異なり、この言葉を「若い盛りの青年たち」として解釈するのではなく、「洛陽の女兒」とする説を唱える。これについては著者に専論があり、自説に基づいて漢詩の新しい解釈が試みられているのである。

さらにもう一つは、『白氏文集』という書名の読み方についてである（六五六頁）。中国古典文学の研究者の間ではよく知られていることだが、この書名の読み方については、近年、平安時代当時から明治中期までは「はくしぶんしゅう」と読

んだ可能性が高いこと、「もんじゅう」の読みが定着したのは明治三〇年前後であることなどを理由に、「はくしぶんしゅう」と読み替えようとする動きもある。しかし著者はこのことに対して、明治中期までの読みの実態や「もんじゅう」という慣用読みの確立時期がどうであれ、「はくしもんじゅう」という読み方はすでに百年以上にわたって日本人に親しまれて定着したものであり、「もはや単なる無機質の記号ではなく、一個の文化的表徴であり、さらに言えば一つの『人格』を持つに至っているとも言える」ので、簡単に読み替えるべきではないと注意を喚起する。そして、もし慣用を廃して『正統』を通すことをよしとするならば、孟浩然や杜甫などの詩人名もそれぞれ「ボウコウゼン」「トフ」と読み替えるべきであり、「それが主張の一貫性ということであり、そういうことを顧慮しないまま『白氏文集』の読み方だけを改めようとするのはいかにも『しいて異を立てる』姿勢であり、木を見て森を見ない行為であると言わざるを得ない」とする明快な論理には、思わず唸らされる。

むろん、著者が本書の中で提示した新しい学説や「ぶんしゅう」読み反対説等については、今後さらに新しい議論を巻き起こす可能性があるが、中国古典文学研究史に一石を投じたことは間違いない。しかも学会誌等に発表した学術論文では

なく、一般読者をも射程に入れた名作集成の中でこのような学術的知見をわかりやすく述べているのは、やはり特筆に値する。著者はけっして漢詩とその解釈をめぐる学説あるいは議論を、研究者たちの専有物または特権として見なさず、敷居を低くして一般読者をもこの議論の中に呼び込もうとしているのである。

これはきわめて重要なメッセージである。周知のとおり、現代社会においては活字離れと平行して漢詩・漢文離れがますます顕著になっている。この問題は諸先学に指摘されてすでに久しいが、斯界では未だにこれといった有力な改善策が立てられておらず、状況も大きくは変わっていない。かつて漢詩文は日本文化の一部であったということが、今の若い世代にはほとんど認識されておらず、たとえ認識されているとしても、現代のわれわれとは関係のない縁遠い古典としか理解されていない。筆者が身の程を弁えずこのような大著の書評を書くことにした理由もまさにここにある。漢文教育に携わる誰もがこれまで以上に真剣にこの問題に向き合い、何らかの手立てを講じなければならぬところまで状況は深刻化しているのである。

本書の著者である宇野氏は、すでに数年前からこのような現状を改善すべく行動を起こしている。NHKラジオの漢詩

講座を担当したのを皮切りに、一般読者をも射程に入れたわかりやすい漢詩注釈書を次々と世に出し、また全日本漢詩連盟の主要メンバーの一人として活躍し、漢詩愛好者のすそ野を拡げるために労苦を惜しまない。本書もそのような一連の活動の中で生まれたものであり、また氏のそのような深い思いが託された一冊として見受けられる。特に本書には、漢詩の名作にふれることによって、時代と国境を超えて存在する普遍的な感情と価値観を、より深く理解してほしい、という著者の願いがこめられているように思われてならない。

最後に余談であるが、現代日本人の古典離れは何も漢詩・漢文に限られたものではない。日本の古典に関しても同様のことが起きている。明治時代まで普通に使われていた変体仮名が、もはや一部の学者にしか読めなくなっているのだ。しかし日本古典文学の教育現場では、近世文学研究者を中心に「和本リテラシー」普及運動が徐々に本格化している。おまけにくずし字学習支援アプリまで開発されているようだ。このような時勢に合わせて、漢文読解支援アプリなるものでも開発されれば、若い世代の漢詩・漢文離れをくい止めることができるかもしれない、とひそかに思う今日この頃である。

(なかお・けんいちろう 熊本大学)